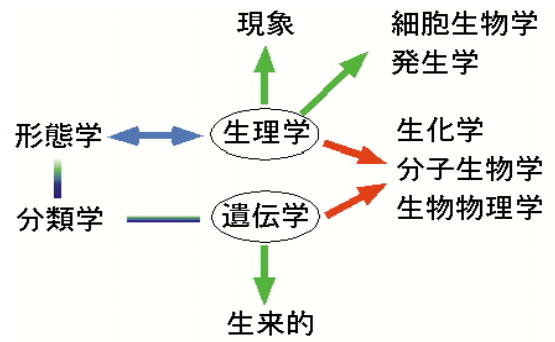


分子遺伝学I

- 本問
- 1.はじめに:超分子機能の遺伝学についての概説
 - 2.細菌の分子遺伝学の基礎
 - 3.神秘の宇宙船バクテリオファージの形態形成
 - 4.バクテリアべん毛モーターの分子構築
 - 5.イオン流を回転力に変換するモーターの仕組みI
 - 6.イオン流を回転力に変換するモーターの仕組みII
 - 7.光のエネルギーでイオン輸送する超分子システム
 - 8.真核生物の分子遺伝学概説
 - 9.細胞骨格系 I(微小管系)
 - 10.細胞骨格系 II(アクチオン系)
 - 11.細胞骨格系 III(セブチン系など)
 - 12.脂質二重膜を制御する蛋白質複合体
 - 13.細胞-基質間および細胞間接着装置
 - 14.多細胞生物の遺伝と進化
 - 15.まとめ
- 木下



教科書

Biochemistry (3rd edition, 2004) by D. Voet & J.G. Voet 生化学(第3版):田宮信雄ら訳(東京化学同人)
Fundamentals of Biochemistry (2nd edition, 2005) by D. Voet, J.G. Voet & C.W. Pratt 基礎生化学:田宮信雄ら訳(東京化学同人)
Biochemistry (6th edition, 2007) by Berg, Tymoczko, Stryer 生化学:(東京化学同人)
Molecular Biology of the Cell (5th edition, 2007) by Alberts et al. 細胞の分子生物学(第四版):(ニュートンプレス)

遺伝年表 I

1859	ダーウィン	:「種の起源」自然選択説の提唱(英)
1865	メンデル	:植物雑種の研究・遺伝に関するメンデルの法則(奥)
1889	ミーシャ	:核抽出物から核酸の分離と命名(瑞)
1900	ド=フリース	:メンデル法則再発見・突然変異説(蘭)
1900	コレンス	:メンデル法則再発見(独)
1900	チェルマック	:メンデル法則再発見(蘭)
1903	ヨハンセン	:マメの研究で、変異・純系説の提唱(丹)
1904	ベーズン	:遺伝子の連鎖現象を観察(英)
1908	ハーディ	:ハーディー・ワインベルグの法則(遺伝子頻度の法則)(英)
1926	モーガン	:ショウジョウバエの染色体地図、遺伝子説の提唱(米)
1928	グリフィス	:肺炎球菌形質転換実験
1931	木原均	:ゲノム説の展開(日)
1935	スタンリー	:タバコモザイクウイルスを結晶化し、単離(米)

遺伝年表 II

1944	アベリー	:DNAが形質転換を起こす物質であることを示唆
1945	ビードル&テータム	:アカバカビでー遺伝子ー酵素説の提唱(米)
1946	レーダーバーグ&ティタム	:大腸菌における有性生殖の発見
1950	シャガルフ	:DNAの塩基組成の法則を提唱
1951	マックリントック	:トウモロコシでトランスポソンの発見
1952	ハーシー&チェイス	:ファージでDNAが遺伝情報を持つことを証明(米)
1953	ワトソン&クリック	:DNA二重らせん構造の仮説を提唱(英)
1958	メセルソン&スタール	:DNAの半保存的複製を証明(米)
1961	ジャコブ&モノー	:遺伝子制御のオペロン説を提唱(仏)
1968	木村資生	:分子進化の中立説(日)
1970	マンデル&ヒガ	:カルシウム法によるDNA移入
1970	ケリー&スミス	:HindIII制限酵素の発見
1973	コーエンら	:組換えDNA実験の基本技術の確立
1975	アシロマ会議	:組換えDNA実験に関するガイドラインの策定
1997	ウィルマツら	:体細胞クローン「ドリー」の誕生(英)
2003	ヒトゲノムの全塩基配列を解読(国際チーム)	

機械論

唯物論(マテリアリズム)

「哲学で、精神的なものに対する物質的なものの根源性を主張し、精神的なものはその現象ないし仮象と見なす認識論的、形而上学的な立場。この考え方は古代のインド・中国や初期ギリシア哲学にもみられるが、近代以後では一八世紀のイギリス・フランスの唯物論、一九世紀のフォイエルバッハの唯物論を経て、マルクスとエンゲルスにより弁証法的唯物論として確立された。脳科学に基礎を置く現代の創発的唯物論に至るまでさまざまな形態をとって、哲学史上絶えず現れている。」

機械論

哲学で、すべての事象の生成変化を自然的、必然的な因果関係によって説明し、目的や意志の介入を認めない立場。
生物を精緻な機械と考え、生命現象を物理化学的法則で説明しようとする立場

唯物論≒機械論≒分子生物学(生物物理学)



1951年に訳本が出版

生命とは何か

量子力学の建設者の一人、E・シュレディンガー
1943年のイギリスで「What is Life? (生命とは何か)」と題する講演を行う。



それが翌1944年に一冊の本として出版。



物理学者として現代風生物機械論を展開

物理学者や生物学者を生物物理研究に向かわせる決定的な影響を与えた

F.H.ウイルキンス
H.C. クリック
J.D.ワトソン など

DNA二重らせん構造の解明(1955年)

ファージ発見と分子遺伝学

分子生物学

生物学の一分野。現在ではDNA分子を扱い、遺伝子クローニングや遺伝子導入など方法論を指すことが多い(分子遺伝学)。本来、生命現象を分子レベルで理解して、それらがいかに制御されているかを研究することが、分子生物学の主な関心である。研究領域は特に遺伝学や生化学と重なる。

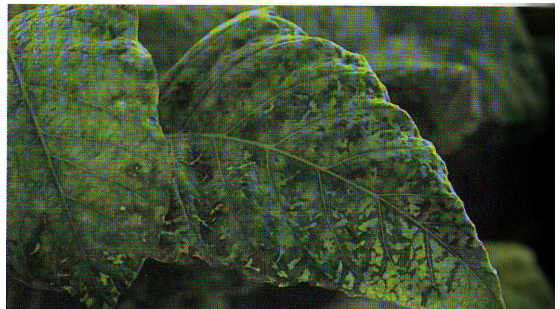
濾過除菌-Seitzの濾過器

バクテリアを濾過する。

現在では、メンブランフィルターを用いる。



タバコモザイクウイルスに感染した葉 I



タバコモザイクウイルスに感染した葉 II



拒抗性遺伝子(株遺伝子)を持つタバコ葉にTMV(タバコモザイクウイルス)を感染させると、感染細胞が積極的に死ぬためウイルスの増殖は感染部位に封じ込まれてしまい、葉全体には広がらない。この反応は過敏反応(HR, hypersensitive reaction)と呼ばれる。

ウイルス発見

タバコの葉にモザイク模様の病斑を起こす病気がタバコの絞り汁で伝染することが知られていた。→細菌感染と考えられていた。

Iwanowsky (1892) : 絞り汁を当時使われていた細菌をのぞくために使われていた素焼きの濾過器を通して感染性が残っていた。
→細菌の産生した毒素の様なもの又は非常に小さい細菌と想像

Beijerinck (1898) : Iwanowskyの追試を行い、細菌の可能性と否定した。
→濾過器を通り抜ける自己増殖能を持つ物体と主張、virus(ウイルス:ラテン語の毒の意味)と名を付けた。

Stanley (1935) : 感染性を示すTMVの結晶化に成功。→自己触媒能を持つ巨大蛋白質であったと報告。→超微小生物であるウイルスが結晶化される化学物質であるという大きな発見。

TMVが蛋白質であるという知見

- 1) 蛋白質変性剤で感染性がなくなった.
- 2) 蛋白質分解酵素で感染性がなくなった.
- 3) TMVに対する抗血清が得られた.

Bawden & Pirie (1936) : TMVにリン酸と糖が含まれ、それがリボ核酸 (RNA)であることを報告 → しかし、RNAが感染性の本体であると気がついた人はだれもいなかった.

TMV粒子の 電子顕微鏡写真

